

武蔵野日曜集会

信愛一如

――ガラテヤ第5章――

1976年1月11日(武蔵野)

小池辰雄

常に我が言に居らば 日本人の融通性 現象即本体 言行一如 神の本願愛 芥種の如き原始
力的な集会 本願道 御霊に在って 本願道を行かざるを得ず イン・クライスト 中路の白
道 本願の声 愛信一如 十字架の蹟き 第二の自然性 禁自己 弥陀の本願他力の名号

【ガラテヤ5】

1 キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな。

2 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。
3 又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律法の全体を行うべき負債あり。
4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたる、恩恵より墮ちたり。
5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。
6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。
7 なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。
8 斯る勸は汝らを召したもう者より出づるにあらず。
9 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。
10 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。
11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛蹟も止みしならん。
12 願くは汝らを乱す者どもの自己を不具にせんことを。

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互いに事えよ。
14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。
15 心せよ、若し互いに咬み食わば相共に亡されん。

16 我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。
17 肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。
18 汝等もし御霊に導かれなば、律法の下にあらず。
19 それ肉の行為はあらわなり。即ち淫行・



汚穢・好色・²⁰偶像崇拜・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒党・分離・異端。
²¹猜忌・酔酒・宴楽などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯
 ることを行う者は神の国を嗣ぐことなし。²²然れど御霊の果は愛・喜悅・平和、
 寛容・仁慈・善良、忠信・²³柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。
²⁴キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけた
 り。

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。²⁶互いに挑み、
 互いに妬みて、虚しき誉を求むることを為な。

●常に我が言に居らば

ガラテヤ書5章、

「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立
 ちて再び奴隷の轡に繋がるな。

「自由」という言葉は、キリスト自身も使つていらつしやる。ヨハネ伝8章31節、

「³¹爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居
 らば、真にわが弟子なり。³²また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を
 得さすべし』(ヨハネ8・31〜32)

とある。「常に我が言に居らば」という前段が大事な事です。キリストの言に常住している。
 そうすると――ま、「弟子である」はいいですけども――真理というものが掴めてくる。
 その真理は即ち自由なんだ。キリストは、

「我は真理である」

と言われた。真の理。キリストは、「我は真理である」という、真理の実体です。その真理
 の実体に連なっている。「居る」というのは、その中に居るということです。「に居る」とい
 うのは、ギリシャ語でも「エン」という字がちゃんと書いてある。

「エン トー ログー トー エモー」「わが言の中に」

とある。即ち、「わが言」は聖書です。別な言葉でいうと、

「聖書の中にいつも居ろ」

というわけです。しかも、その言中の言はキリスト自身なんだから。キリストという言、
 キリストという真理。その表現体であるところの聖書。その中に魂が入り込んでい
 魂が入り込んでいれば、真理がわかる。入り込んでいないで、外から研究なんかしてたの
 では、これは分かん。

どこまでも、そういった存在的な実存的な結びつきです。そうすると、言に本当に溶か
 されてしまっているわけです。言葉に囚われている、或は囚われている言葉は躓きになり
 ますけれども。逆説的にいうと、キリストという、キリストの言、聖書の言に囚われてい



ると――普通は囚われると儀文になる。そして、「聖書にはこうある」というわけで、そうでないものはみんな真理でないような顔をする、そういう非常にパリサイ的な信仰もあるけれども――聖書の言は、概念ではないですから、無限無量の内容を持った言だから、自由なんです。だから、自由がある。キリストの言はちゃんとそういう有機体的構造になっている。

●日本人の融通性

「有機体」という言葉がヘタするとまた、神学的にいうと躓きになる。バルトの危機神学という弁証法神学では、有機体的なことに對しては反對するわけです。ヘーゲルの弁証法というのがありますね。

「正・反・合」(テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ)

という。この「正・反・合」でもってだんだん展開していく。これは理性、悟性の真理の判断の仕方はこうなっていくわけです。これはしかしながらやはり、人間の理性の限界内におけるところの構造なので、

「いや、そういうことでは本当の真理には到達しない」

と言って、ヘーゲルに反對したのがキルケゴールです。キルケゴールの弁証法は、絶対矛盾の弁証法なんです。そういったような対立を考えているうちはダメだと。これはまだ同質の世界の対立なんだ。同質の世界での、ちょうど、道德の世界で善だ悪だとやっているのと同じなんです。

「これは悪だ、これは善だ」

と言って、相対的判断でやっている。それは悪くはないよ。常識的な判断はみなそれです。でも、その「善だ、悪だ」なんて、そんなことを常識的にやっているうちは、いつまでたっても、本当の世界には入れない。キリストの義とか、キリストの愛というのは質的に違う。キルケゴールの角度は、

「義と罪。これは相対的な、こつちが義であつてあつちが罪であるというような、そういう判断ではない。絶対矛盾である。罪は義に同じ重さでもって対立しているものではない。質が違うんだ、異質なんだ」

と言うわけです。そして今度は、神と人。これも異質である。今度はそういうように、はつきりと切ってしまった。バルトの神学がそうなんです。だから、人間は神になれない。

日本では、神々というのがありますがね、乃木將軍が死ぬと乃木神社なんてことになる。神さまになってしまふ。神格化してしまふ。日本人のものの考え方には、非常にそういった、何といえますかね、連続性――相対を常に乗り越えるというか、変わっていくような――そういうところがある。これはどういうところから来ているかという、日本人は、春夏秋冬の移り変わりが非常にハーモニアスに行っている。寒さと暑さとのもの凄いコントラ



ストではなくて、質的な違いではなくて。だから、日本人というのは非常に融通性がきくんです。移り変わっていく。和辻さんではないが、「風土」というのは、その民族の性格にずいぶん大きな影響を与えた。これはもう当然です。それが悪いと言うのではないですよ。日本人は、どうもとかく、そういう面があるから、善にも本当に強くなければ、本当の悪をも知らんというようなことになってしまう。そういった意味の日本人の融通性ということ。話はちよつと飛びましたけれども。

義に対して罪、これはどうにもならん。どうしても、この罪は大慈大悲でもって消すわけにいかんというのが、この十字架というわけです。だから、沙漠の宗教は日本人の性格には合わないんだよ、この沙漠の宗教というのは。十字架なんていう血なまぐさいのはね。

「人間は罪びとである」

と、今度は決めつけてしまつて、まあ、プロテスタントはそこが非常に強いわけだ。それで、何も神さまとの通じがいかないようになる。これを私は言いだしたら神学論になるから、もうよそうかな。第三卷(『無の神学』)でもって、これはとつくりやらなくてはならないところだ。

●現象即本体

とにかく、義と罪との、贖いの宗教で、罪を完全に消して、キリストの義、キリストの真理、キリストの言によつて、罪に囚われているところから本当に自由にならなくてはいいかん。

「行為ではない。行為でもって義になんか到達できない。キリストを信受しなさい、

受けとりなさい、キリストの贖いを受けとりなさい」

と、パウロが一生懸命で言っている。パウロは自分の義を主張していたんだから。義を私にしていた。

「俺はとんでもないことだつた、大きな間違いをした。キリストが、この自分の義を私して律法の義でもって誇つていた俺をひっくり返してくれた。何でひっくり返したか。十字架でひっくり返した」

と。そういうわけですよ。

だから、パウロにとつては、十字架は大変はつきりしている。ヨハネはそれほどではないけれども。ヨハネなんていうのは、旧約の贖いの宗教を、もつと楽な角度から溶けるように受けとつてしまつてゐる。パウロはそれを身をもつてひっくり返されて受けとつた。

だから、罪に囚われている――罪というのは要するに自我です――自我に囚われているというその罪。

「自我そのものが罪である」

と。キルケゴールははつきりとそう言っている。「死への病」という。そんなことでもって、だんだん真理なんかへいくものではないというわけだ。もちろん、ヘーゲルの言っている



ことは全部間違っているなんて言うのではない。ヘーゲルも大事なある構造を持っている。

ニーチェはキリストを非常に誤解しているけれども、彼も劇薬みたいなやつでね、あの言葉をひっくり返すとなかなか真理がある。だから、実存哲学のキルケゴールとニーチェが非常に評価されている。今のバルトの危機神学という弁証法神学というのは、このキルケゴールの流れを汲んでいる。ルター、キルケゴールときているわけです。ルターはもちろんパウロです。

そういう、義の真理。キリストという、神の御意を完全に表現して行つたことを義といいます。それが即ち、神の真理を、神という真理を体現している。この本(『無者キリスト』)にも私は書いたでしょ。キリストは、

「我は真の葡萄の樹である」

と言われる。葡萄の木があるのに、キリストは自分を「真の葡萄の樹」とは何ごとか。天界にいたキリストが地界に現象した。普通は、すべての現象体は本体界のひとつの徴であるといつて、

「移りゆくものはひとつの比喩にすぎない。象徴である。影像である」

というが、キリストは影像ではないんだ。キリストは、移りゆく体において移らざるものをちゃんと持つて表していた。影像ではないから、

「私こそ本当の葡萄の樹なんだ。あそこにある葡萄の木は、私の事態の影像である」

と、むしろ逆に言うところです。

「神さまは本当の農夫だ。私は葡萄の根であり幹である。お前たちは枝であり、葉であり、実である。現実の葡萄はそれを表しているだけだ」

と、こういうわけです。だから、本体界がここに、現象即本体、本体即現象として現れているのがキリストです。申し上げているとおり、

「我を見し者は父を見しなり」

ということがその言葉です。

「現象即本体であるぞ」

ということですが、「我を見し者は父を見しなり」とは。そのキリストに居れば、キリストが口から発するものは真理の言、手足に発するものは生命の行為。生命を与える行為、人を救う行為です。

●言行一如

人を救う行為を愛という。人造りの行為を愛というんですよ。好きだから愛するというのも愛でしょう。愛にはいろんなものがありますよ。人間の心理状態のいろんなものが作用する。これつきりなんて、観念でわりきれものではない。けれども、何が中心になつて



いるかということが大事なんです。人間の知情意なんていったって、これも渾然としている。いろいろそれは分けてはいるけれども、現実というものは分けきれものではない。分けたら、ちょうど解剖学みたいに死んでしまいます。

その人の愛の中心になつていゝるものは何か。人間であるかぎり、いろいろなものがあるよ。それを、

「あいつはどうだ、こいつはどうだ」

なんて品定めすることはひとつもいらん。人のことをどうのこうのと言つてゐる人は、決して本当の意味で伸びないですよ。

要するに、いつも申し上げてゐるとおり、言葉と行為は一つである。口に発すれば言葉であり、手足に発すれば行為である。だから、それを言行一如という。なぜ、一如かというと、発する根源を見ているから、一如なんです。現象面を見て言つてゐるのではない。根源が一つで、それは現象面が違つて一向差し支えない。本当のところから出てゐるものは、これは同じことなんだ。まだ、

「言うは易く、行うは難し」

と言つてゐるのは、この根源を知らないから、そんなバカなことを言つてゐる。そんなことを言つて、言葉と行為とを整えようとしたって、整うものではない。整えてみたって、それは偽りです。

「あの人は言葉通り行為してゐる」

なんて、偽善者だよそんなものは。

「言葉通りに行為する」

と言つて、一生懸命でやつてゐる行為は「律法の義」だよ。そして、偽善者です、そういうものは。つくられたる行為です。根源から発してゐるものは、これはもうそんなことは言わなくても、ちゃんと質が同じなんです。言つてゐることとしてゐることが、質が同じです。

ここにチューリップとクロッカスの花がある。これは同じ太陽から光を受けて、同じ水を吸つてゐる。花の形は違う。違いながら、これは花ということの一つです。それと同じです。白が行為で、赤が言葉なら、同じことなんです。なぜ、そういう見方ができないかというと、結局、そこを見てないから。一般の道德の世界はいつも、その現象面だけを見て、それを整えようとしたって、これはダメなんだ。くたびれてしまふ。結局、すべてが偽善であるということになつてしまふ。本ものでないということになつてしまふ。

そういうキリストという言。キリストという行為と言つてもいいよ、

「初めに行為あり」

だつていいんだから。キリストという言だとか行だとかいうことは、キリストはこの言も行も、キリストは信ですよ。神さまを信じきつて、信じこんで、だまかされて歩いていた



んだ、キリストは。それから始まっている。だから、信・言・行はみな一つ。もちろん、根底は信です。

「初めに信あり」

と言ったっていいんだ。

●神の本願愛

「キリストが神さまを信ずる」とは一体何ですか。神さまに捕まえられてしまって、愛されてしまったって、動かされてしまっただけじゃない。だから、本当は神の愛——これが私の言うところの本願愛です——神の本願愛がキリストを動かしている。それを100%に受けとっているというのが「信」という。

「信仰が何かではない」

と申し上げているのもその通りです。

「キリストの信が素晴らしい、キリストの信仰が素晴らしい」

と言って、真似したって真似はできやしない。キリストはひとつも素晴らしいことはない。こんなことをどこの牧師が言うかね、

「キリストは素晴らしい」

なんて。キリストは素晴らしい。神さまが素晴らしいんです。神さまが素晴らしいくて、そうして、キリストを捕まえてしまって動かしたから、もうキリストはたまらないわけです。それを受けとって、受けとらざるを得ない、動かされざるを得ない、言わざるを得ない、行わざるを得ないというのが、キリストの信の姿です。だから、神という愛を受けとることが信です。信愛一如は、本当はひっくり返して、愛、信、一如と言った方がいいくらいなんです。

人間の側の「信ずる」という言葉をみんな、こつち側からの作用のように思っているだろう。ところが、そうではない。それをさすがは、マルチン・ルターが『ロマ書序文』で言っている。私はこの本の中にもどこかに書いてある。

「まことの信仰は……」

という有名な言葉がある。私は、ルターの書いた言葉の中で最も大事なものの一つだと思っています。

「まことの信仰とは我々の中における神さまの業である。」

神の業だという。我々の中に神さまが働いて、そして、信仰というものを起こしてくれた。「私が信じた」なんてなものではないぞと。

この神の業は我々を変えて、新しく神から生まれしめて、

これは「キリストから」と言っただけで同じことです。

旧き人間アダムを



即ち旧き生まれつきの我というものを、

殺してしまつて、我々を全く別な人に、その心において、その心情において、その思いにおいて、その諸々の力において、全く別な人につくつてしまつ。そして、聖霊をその自分の業と共にもちたつところのもの。そういった神業が信である。

これが信仰というものだと言ふんです。ルターさんを取り損なつては困るんだよ。「ルター、ルター」なんて言つたつて、みんな取り損ないなんだ、プロテスタントは。

おお、なんと信仰というものは生き生きとした、作用的な、活動的な力強い事柄ではありませんか。そついうわけだから、間断なく善きことをしないではいられないほどのものである。」

しないということが不可能なほどのものである。信即行の世界です。これを受けとつたら、もう善きことをせざるを得ない。「善きこと」というのは、もうひとつ簡単にいうと、「愛のわざ」をせざるを得ないということです。

だから今度は、『クリスチャンの自由』の中で信仰のことを語つて、

「これはどうしても愛に展開するものである」

と、結論は愛になつてゐる。クリスチャンの自由というのは、自由は愛への自由である。自分の罪からの、自我からの自由が同時に即、愛への自由、人を救う自由である。自我からの、罪からの自由というのはまだ消極面、内側の面です。そうしたら、必ずその自由は人を助けるところの自由な業となつていく。義務ではない。自由な業となつていく。

今の人たちは「自由」だとか「自主」なんて言つてゐるけれども、自由とか自主なんて言うなら、まずマルチン・ルターの『クリスチャンの自由』というこの本を読んでから言つてくださいと言いたい。

私はルターの『ロマ書序文』と『クリスチャンの自由』のドイツ語のテキストを、詳しく註を書いて出した。それから、『三福音書の抜粋』と『ヨハネ伝』。この四つの教科書しか私は作らない。これは永遠的なものだから、私が死んでも、けれども、これを使う先生方が極めて少ない。大学の先生が聖書をほとんど読んでいらつしやらない。哲学者も聖書を持つてゐないから、私は驚いたよ。それで、

「やれ、カントだ、キルケゴールだ」

なんてやつてゐるんだから。何ということですかね。大学の先生で私の本を買つてくれた人はいないもの。仕方がないから、やつたのは二、三人ゐるけれども。そんなもんです。だから、私はまだ死ぬわけにはいかない。どうしても、こういう真理の戦いを進めていかなければ。

●芥種の如き原始力的な集会

皆さんは、



「このキリストの真理、キリストという真理、この自由、この愛、この義、これは
たまらなくて聖名を讃えながら進んでいく」

という人は私とどこまでも行きます。そうでなくて、

「小池先生の勉強の仕方はどうだ。在り方はどうだ。なんだかんだ」

と言っている人はみんな出ていく。まあ、そうでなくても、何か他の事情で出ていく方もあります。いろいろです。どうでもいいんだ、私はそんなことは。今度も、今年から来ない人が二、三人いる。どうでもいいんだ、私は何も心配していない。どうぞ、お出かけください。私はその人たちに手紙を書いてやった、

「私は、あなた方がここでもって本当によくやってくださった。その喜ばしい、に

こにこした顔しか私は思い出しませんから、ご安心ください」

と。聖霊の世界は人を審かん。私が本当に聖霊と言いながら——この集会から出ていった人がたくさんあるよ。私はここに写真をかけてある。あの野郎なんて思わない。見ては時々祈っているわけだ——これができなかったら、私は聖霊なんていうことを言っではいかん。そういうことで、躓いた人や、誤解している人は今に、

「ああ、やつぱり」

という時が来るでしょう。私が向こう側に逝ってから分かるかもしれない。私は皆さんに、「誓え」だとか、そんなことは一つも言わん。出るも入るも留まるも、それはご自由です。

集会は小さくても、芥種からしだねの如き原始力的な集会。そして、日本で第一流のものを私は書いていきますから。第三巻が勝負所だけれどもね。ある自信を持っています。そうでないものは私は書かないつもりですから、そんないい加減なものなら。

そういうわけで、私も大変、烈々たる希望に満ちて、この年を迎えているわけです。お互いさまに人間だから、躓かたり転んだり滑ったりいろいろするだろうよ。

「よしつ、そういう時は担かいであげますよ」

と言って、お互いに担いで進んで行くような友情でなかったらダメです。

「あいつは躓つきやがった。しょうがねえな」

なんて、そんな「しょうがねえな」じゃないよ。これは「サマリヤ人びと」のことが書いてあるとおります。

ある人から実に切々たる手紙をもらいました。

「こんな本は見たことがない」

と。私はあなた方としょっちゅう会っているからね、あなた方には手紙はほとんど書かないし、あなた方もよこさないけれども。この本(『無者キリスト』)は私の手紙だと思って読んでくださいよ。時々、お手紙をくださっても結構ですが。

キリストはそういった、さつきからいろいろ言っているような、この世の自由ではない。この頃、天気はいいね。お正月は素晴らしい天気だった。雲から自由な大空みたいに、晴



天白日というやつ。この晴天白日の如き自由です。この自由をいただくと、この自由は本当に生命である。本当の生命は自由であるわけです。

「自由を得させんために」

というのは、別な言葉でいうと、

「永遠の生命を与えんために」

だっていい。罪にも死にも何にも囚われない。完全に自由。そういう質的なはつきりした世界に入る。

●本願道

バルト、ブルンナーはとにかく、マルチン・ルター、パウロの線に進んでいこうとした。その弁証法神学には非常な真理性がある。向こう側からのものであるということをはつきり言っている。シュラエルマッハーのこちら側からの「絶対帰依の感情」とかいうようなことではない。こちら側からの信頼とか感情とかいうことではない。

そうだねえ、藤井先生が

「信頼、信頼」

と言っていたけれども、ちよつとやつぱり無教会に限界があったね。「信頼」というと、

「私はどうもまだ信頼が足りない」

と言って、自分の信頼を問題にしたらどうなるんですか。苦しくなるですよ、そんなことをしたら。とにかく、上からの愛や力や生命や光に圧倒されて生きていなければダメです。もう「信頼」もへつたくれもないんだから。圧倒されている。これが、私が言った「本願道」というんです。私は本願道という言葉がとても好きなんだ。この『無者キリスト』の一番終りの詩が「本願道」という詩でしょうが。

あなた方、本当に身につけてくださいよ。身につけていけば、もう何ということはないですよ。ええ、あまり強張^{こわば}らないでね。強張るとダメですよ、楽な気持ちでいく。もう、私はその次は、ちよつと異言になりそうだが、

だけれども、パウロがまた、ガラテヤ書5章で、

「キリストは自由を得させん為に我らを釈^とき放ちたまえり。然れば堅く立

ちて再び奴隷^{くびき}の轡^{つな}に繋がるな。

なんて、相手が仕方がないから、パウロもこんな言い方をするけれども、「堅く立ちて」なんて言わなくたっていいんだよ。

「楽しいではないか」

と言えはいんだ。

「キリストは自由を得させん為に我らを解放ちたまえり。何たる喜びにあらずや」で結構なんだ。



「その喜びで行け」

と書いてくれればよかったんだけど、

「堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな」

というと、

「そうか、大変だなあ」

なんて思う。そういうように読んだらダメですよ。それはいわゆる儀文にこだわっている。

「パウロさん、なにをこんなくだかしいことを言うか。もうたくさんだよ」

なんていうくらいの魂にならなくてはダメです。私は、パウロをしつかり学べと言いながら、また逆みたいなことを言うけれども、その気持は分かるでしょうね。

2 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。

相手がユダヤ人だからもう、割礼が大変なんだ、ユダヤ人にとつては。割礼というのは男の話ですが。割礼を受けなければ律法の民でないという。イスラエルは神の民であり、神はイスラエルの神であるという、その契約の印としての割礼です。そして、契約を守ることは律法を守ることなんです、契約を続けるために。即ち、「律法と割礼」なんだ。割礼はその宗教的な儀式の方だ。

「そんなことをやって、神の民なんて思ったらとんでもない間違いだ、キリストは何のために来たのか」

というわけです。預言者たちの宗教をもうひとつ次元を高くして、これを全うせんためにキリストはいらっしゃったんですからね。

3 又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律法の全体を行うべき負債あり。
あかし おいめ

割礼を受けたというならば、律法を完全に行わなければダメだ。それだけの義務があると大変なことだ、これは。誰もできない。みんな落第だ。モーセの十誡に及第する人はいないわけだ。モーセの十誡を法的には及第できますよね、法律的な角度からなら。誰も殺人はしやしない。けれども、キリストが言われたように、

「兄弟を憎むことは殺したるなり」

と言ったら、みんなこれはダメになってしまう。

4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたる、恩恵より落ちたり。
めぐみ

「私があんなに言ったのに、また元へ戻ってそんなことを考えているか。とんでもない話だ。キリストから離れた。キリストという贖罪の、聖霊をくださるこの恵みから外れてしまったではないか」



●御霊に在って

5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

「御霊により」というのは「 Pneuma テイ」という、「 Pneuma」という字の三格を使っているのである。

「御霊に在って」(イン・ガイスト、イン・スピリッツ)

と同じことです。「信仰により」は「エック」という字が使っている。「信仰というものから」信仰が原因になって希望をいただく。

「義とせられることを一生懸命で焦がれ待っている」

という、非常に切実に待っているという意味です。強いんです。

「義とされることを切実に待っております」

ということ。これは、

「信仰によつて義とされる」

とパウロが言っていることと矛盾はしない。この場合の「義とせられる」というのは、現実に本当に義とされるとき、信仰における義というものと、それから本当に義が現実となっていくということ。即ち、実を本当に結ぶような意味におけるところの「義とされんことを待っている」というのはそのことです。

キリストを100%に受けとれば、直ちに義とされているんですよ。義とされているから、いよいよ今度は、現実の義となっていく。信仰的現実から生^なまの現実へだんだん移っていくというんです。地上では、その生^なまの現実は来ませんよ、最終的には。地上ではどうしても生^なまの現実はあるところまでしか行きはしない。完全に生^なまの現実を現象したのはキリストの他にいないんだからね。だから、

「義とされんことを待っている」

という。その日の来たらんことを待つ。神さまの新天地の最後の姿が、この本当の義人、生^なまの義人というところです。だから、

「御霊により、信仰によつて」

と。これは

「御霊を受けとることによつて」

でもいい。御霊に在っていいよキリストを受けとることによつて、希望をいただき、即ち、心身の全体の完全な贖いを待っているのが、「希望により」ということ。希望というのはそうです。これはロマ書8章がそれです。

「その新天地の最後の姿を今、人も自然もみな呻き待っている、呻き望んでいる。その日の栄光は今の苦しみに比ぶべきもなし」

と、パウロが言っている。もちろん、非常に終末的な希望です。「終末的な希望」(エスカト



ローギツシュ・ホフメング)のことを言っている。これは地上における完成を言っているのではない。

6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

「キリスト・イエスに在つては割礼を受けるも割礼を受けないも、そんなことは問題でない。ただ愛に由りてはたらく信仰のみ問題である」

と。はい、6節がまた大事です。キリスト・イエスに在る者は、割礼は受けても受けなくても問題ではないという。よく無教会で、

「洗礼を受けても受けなくても、そんなものは問題でない」

と、向こうではすぐ、先生方は洗礼のことを言っていました。それはそのとおりですね。だけれども、無教会では、では「御霊の洗礼」のことを言うかという、言わないんだ。水の洗礼のことばかり問題にして、

「それを受けるも受けないも問題でない。信仰だけだ」と言っている。

「キリストは御霊の洗礼を与えたために来た」

と、洗礼のヨハネが言っているとおりです。これはしょうがないよ、私ははっきり御霊のバプテスマを受けたから。皆さんもそうなんだ。だから、はつきり違うというわけです。

●本願道を行かざるを得ず

無教会は私に対してはこれ(拒絶)だから、無教会から注文は来ないよ。教会の牧師さんからたくさん注文が来た。無教会は、けれども知らざるような顔している。黙殺する。本を或る人たちに贈りました。返事はちよつと電話で言ってみたり、葉書でちよつと書いてみたり。そんなものだよな。気の毒になるね、本当に。私はそんな相対的な判断は乗り越えていますから、どう思われたつて、痛くも痒くもない。ただ、

「かわいそうだなあ、相変わらずだなあ」

と思うだけです。そんなことを問題にしている、私の熾んな魂が生きていられるかということです。

原始福音の人たちは読んでいるでしょうね、おそらく。だけれども、まだ本当に評価しているかはちよつと分からないよ。あれは手島さんで占領されている魂だから。まあ、それはそれでいいけれどもね。じっくりお読みになると、もつと内容があれになるんだけれどもね。まあ、いいよ、彼らはまた彼らのよさがあるから。

6……ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

ルターが言っているでしょ、

「本当の信仰は愛に働かざるを得ない」



と。だから、これを部分判断としてはいかんですよ、全称判断として読まなくては。信仰というものは愛によりて働くものです。だから、「信仰のみ」と言っても、その陰には愛がある。「愛のみ」と言ってもその陰には信仰がある。だから、私はここに「信愛一如」という。皆さんは、絶対に信仰と愛とを離してはいかん。

そういった在り方をしているのが、本当の自由の世界です。人間は感情的に自由というものが好きなもんだよ、勝手気儘というやつが。

「あつ、今日は学校がない。自由だな」

なんて。その学校のない自由の時に何しているか。本当に力一杯に勉強なり、あるいは山野を駆けめぐるなりしているか。

「アルバイト」という言葉がある。ヒルティさんは非常にアルバイトを、労働を、働くことを評価しました。

「本当に働いてない者は本当に生きてない」

くらいのことをもちろん言ってます。学生の、「働く」ということは勉強することだ。しかし、この働くのが、何か義務であつたり、金儲けのためであつたり、なんてなことだったら――それは相対的現実では、働くのは生活のためにみんな働きます――だけれども、それが生活のために働くというような「ために」という世界ではダメなんです。神さまはどうですか。キリストは何と言いましたか。

「神は働いているが、私も神さまと一緒に今日も明日も働く」

と言われた。働かざるを得ない。進み行かざるを得ないと言う。活動せざるを得ない。働かざるを得ない。勉強せざるを得ない。みんな「ざるを得ない」世界です。もう、真理は「ざるを得ない」のほかにないんですよ。

「本願の道を行かざるを得ない。本願道を行かざるを得ず。神さまが『やれ!』と

言うから、やっているんだ」

という他に言い方はないんだ。

●イン・クライスト

「ために」という世界はダメなんです。「ために」(フォア)と言ったつていいよ。内村鑑三先生が、

「日本のために、キリストのために」(フォア・ジャパン、フォア・クライスト)

なんて、「ために」と言うものだから、みんな一生懸命で「ために、ために」と言っているんだ。なにも私は反旗を翻すわけではないけれども。内村先生が「ために」としか言えなかった――「言えなかった」と言ったら悪いけれども――なぜ、「イン・クライスト」と仰つしやらなかったか。「キリストに在つて」と。

「ボーイズ ビー アンビシャス イン、クライスト」



「青年よ、キリストに在つて、大志を抱け」

と言つたそうだよ、あのクラーク先生は。あの「イン・クライスト」を取つてしまったんだ、みんな。手放して大志を抱いたら、自分本位のことに、ヘタするとなる。「イン・クライスト」です。キリストは正に、

「神の中に、父の中に」(イン・ゴッド、イン・ファーザー)です。

この「フォア」が、ヘタするとんでもない間違いを起こす。これはパウロがその「フォア」のとりででもない間違いをまず示してくれた。ユダヤ教のために迫害した。ユダヤ教のために熱心なんだ。この「ために」が熱心なんだ。そして、プロテスタントの教理のためにカトリックを迫害する。カトリックとプロテスタントの宗教争いはみんな「ために」の世界だ。結局、「イズム」になる。主義主張になっている。だから、私は「無教会主義」なんてのは嫌いなんだ。「主義、主義」というのはダメだ。

そんなこと言うものだから、私は無教会に嫌われる。嫌われたつていいよ。仕方がない、真理のためには。真理に在つてだから。「聖名に在つて」です。

「聖名に在つて」

ということが根底なら、

「聖名のために」

と言つたつていいですよ。「に在つて」という世界を抜きにして、「ために」と言つたら危ないという話です。

「それでは、うつかり、『ために』なんて言えないな」

なんて、そうじゃないよ。そうじゃないけれども、奥がちゃんとなければダメです。奥がなくて、「ために」なんていうところばかりやっているものだから、ためにならないんですよ(笑)。

● 中路の白道

この「イン」「中」の世界が大事なんです。一遍上人の語録(播州法語集)の中に面白い言葉がある。

「中路の白道は南無阿弥陀仏なり」

と。これは愉快的言葉だな。なにしろ、仏教の坊さんは素晴らしいところを掴んでいる。こういう言葉はもうたまらないね、私は読んでいると。「中路の白道」ときたよ。私が「黄金中道」と言つたでしょ。「中路の白道」は「中道」でいいわけなんだ。右でも左でもない。とにかく、右にそれたり、左にそれたりしない。いい加減な真ん中ではない。いわゆる中性ではダメだ。

男性、女性とあるけれども、中性ではダメだ。男性と女性を、両方を本当に持っている



真ん中の男、女性というのがあつた。これは今日初めて言うけれども。この男女性というのが本当の人間なんだ。

「私は男女性両方を持っているから、結婚する必要はありませんよ」

と、そういう人があつたら、いいよそれで(笑)。キリストなんか、そうだよ。キリストには非常に女性的なものと、男性的なものと両方ある。キリストは本当に両方あるよ。あれは男だか、女だかわからない。こんな言い方をしたら、申し訳ないですが。キリストは、そういう男性中の男性――女性中の女性ではないけれども――女性も持っている。「幸いなかな」のあの山上の垂訓の始めの方は女性道だからね。

女性道を本当に持つ人が実は逆に、もの凄い男、性道を持っている人なんです。本願にこれ従うというのは女性道なんです。ところが、本願にこれ従うということは、本願が入っているんだから、今度はもの凄い男性道なんです。絶対の受け身は絶対の能動になつてしまふ。男性は能動的なもので、女性を受動的なものだけれども。その両面が本当に自分の中に生きていなければ、本当の人間になれない。威張りくさつてばかりいるやつはダメなんだ。ワンマンというやつは困るね。ワンマンがいるね、ときどき。それから、男でも、何だか訳のわからないようなのがある。女の方は女性だから、女性道を本当に行けば、そこに女でありながら、何かしらんけれども、力強いものが来ているんです。

「中路の白道」という。「中路」とは何かというと、ここには面白いことが書いてあるな。水と火。「水」は、何かすぐ怒るようなことを表すひとつの例えに言っている。「火」の方は、貪欲の例えに言っている。だから、怒ったり、貪欲であつたら、どっちもいかに。そういうたような煩惱的な動きからはずれた、そういう白道を行かなくてはいかんというようなことを言っている。水と火はちよつと例えはおかしいと思つていらっしゃるけれども。要するに、本当の真ん中、「中」ということです。

漢字は素晴らしいね、この「中」という字は。もともと、これは円を貫いている軸なんだ。地球は「中」を表している。この線は地軸です。太陽の回りを回転している。コマのように、一本で立っている。これは回転しているから立っている。動いているから。この「中」ということ。真ん中。中軸がある。人間でも脊椎骨というのは真ん中だ。そういう、何も囚われないところの道がこの「白道」ということ。その「中路の白道」は南無阿弥陀仏と称名するところの道である。南無阿弥陀仏と称えることは実は、称えさせられている。こつちから一生懸命で人間的な熱情で、「南無阿弥陀仏」をやったって、そんなのは疲れてしまふよ。自ずから南無阿弥陀仏と上から何か響いてくるような、その声を受けとっているような在り方です。

●本願の声

こないだ、汽車に乗っていて、お隣りの人と話をした。あなたは何かご趣味ですかと聞



いたら、尺八だと言うから、尺八の呼吸はどういうところにあるんですかと聞いたら、
「あれは、自分で吹こうとしたらダメだ。宇宙の大気をして吹かしめようとして、
尺八の中を空っぽにしようとするような気持ちで吹くと、本当の音が出るんですよ」

と言う。私はそれを聞いて、もうピタリですよ、信仰の世界と同じだから。今度私は、『宗教と芸術』(後に第二巻『芸術のたましい』と改題、1976年刊)という本を書くけれども、そのような角度から――本当の芸術の道は何かと――美というものの新しい概念を私は盛り込むつもりです。

「南無阿弥陀仏」と称えしめられる。「主さま」と言わしめられる。祈らしめられる。祈りは即ち、神の声、キリストの声である。旧約の詩篇はまだこちら側からの叫びがどうも多い。私は旧約の詩篇は昔は好きだったけれども、この頃は昔ほどではない。もちろん、それを新約の光で読めばまたいいけれども。何といつても、預言者は神さまの声を聞いて、それを伝えているから、預言書というのは凄い。上からの言葉ですから。本願の声ですから。新約聖書は、みんなそれが来ているよ。キリストからの示しでやってきている。旧約では何と言ったって預言書です。

南無阿弥陀仏は、南無阿弥陀仏とこちらが言わしめられて、自ずから発する。異言がそうでしょうが。異言は、語ろうとして語っているのではない。内側から爆発してくるんです、異言というのは。皆さんが讃美歌を歌うときに、本当にそこの中に入って歌うと、歌わしめられるわけです。歌わしめられている讃美歌が本当の讃美歌の声だ。

●愛信一如

だから、

「愛によりて働く信仰のみ益あり」

というのが、さっきの

「まことの信仰は何ぞや」

と、ルターが言ったあれです。愛に働かざるを得ない。信は即ち愛することである。信ずるとは、キリストの贖罪の事態、聖霊の事態、復活の生命の事態をみな受けとることを「信ずる」という。受けとるその内容は何ですか。みんなキリストの愛ではないですか。愛の実質ではないですか。愛の実質を受けることが「信」なんだから。愛せられることと信ずることは一つである。愛信一如と、ひっくり返した方がいくらいです。愛信なんて言い方はあまりしないから、信愛と書きましたけれども。これはもうひとつ別な言葉で言うくと、恵信一如なんです。恵みと信仰とは一つである。

「恩恵により信仰によりて救われたり」

とエペソ書かどこかに出ている。キリストの愛は恵みなんだからね。恵信一如です。問題ないでしょ、もう。楽しくてしょうがない、お互いに。



「よし、行きましょう」

と。「皆さん、仲良くしなさい」なんて、私が言わなくなったって、もう仲良くならざるを得ない。お互いに担わざるを得ない。そうですよ。それを、何のかんと言つて出ていく人は結局、パリサイ的な気持になるから出ていく。まあ、そうでない人もあるでしょう。何も私は人をどうのこうのと言いたくはない。

「お気の毒だなあ。この気合をどうしてお受けにならなかったか」

と思う。いろんな具体的な問題があるでしょう。けれども、

「我は火を地に投ぜんために来れり。……娘は母に…分れ争わん」(ルカ12・49

…53)

なんて、キリストの烈しい言葉がある。それから落第したか何かしらんけれども。

とにかく、皆さん、いろんなことにでつくわして、本当にキリストに付いてください。私にはありませんよ。キリストに本当にしがみついて――「しがみついて」ではない――キリストに捕まえられているということに気がついて進んで行くのさ。必ず勝利します。どんなことがあっても、勝利します。それだけ図太い信仰にならなかつたら、この20世紀を最後まで突破できない。「図太い」という言葉はおかしいけれども。私はあなた方をその意味において信じています。また、いろんな人、ここから去って行った人も、どうぞそうなつてくださいますと私は祈ります。

「私をどう思ったつていい。しかし、キリストにそのようになってください」

と。それだけです。相対的な判断、毀誉褒貶を完全に乗り越えている世界に入つてごらん。もの凄いことになるから。もう、内側が火のように燃えている。原始福音の連中が何人いても、私はビクともしないで話す。なぜかという、彼らも燃えているだろうが、更に私はもつと燃えているよと言いたいくらいですから。これだけ重厚なパウロの構造がだんだん身につけてきたらば、昔の坊さんの言葉がビリビリ響いてくる。そして、坊さんたちの世界よりもうひとつ凄い世界があるんだから、このキリストの世界は。もう何とも言えないですよ。それを表現しないでは、死ぬわけにいかん。

●十字架の躓き

7 なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。

パウロは嘆いているわけだ。

8 斯る勸は汝らを召したもう者より出づるにあらず。9 少しのパン種は

即ち、いろんなパリサイ的なパン種だね、

粉の團塊をみな膨れしむ。

それでみんなおかしいことになってくる。

10 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。



お前たちは大丈夫だろうね、私は本当にそう思うと。

されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。

パウロは審かない。神さまがそういう人たちを審くから、神さまに委ねておけばいい。人のことをどうこう言うことはひとつもいらん。真理はそれ自ら証していきますから。第三者をどうのこうのとひとつも言う必要はない。そういうことで進んで行けばいい。そして、躓いている人があつたら、「いや、大丈夫だよ」と言つて、その人たちをいろいろ慰め励まして、本道に立ち帰らせることが、さつきから言つているところの愛というんです。天国の本当の土台を築いているのは、キリストの十字架を負っている人たちです。

「汝らを擾す者は、誰にもあれ、誰であろうとダメだ。神さまの審判を受けるから、こつちがどうすることは何もいらん」と。

11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝え、何ぞなお迫害せられんや。

「割礼をユダヤ人に言つていれば、何ということはなく無難だったけれども。そんなものは問題ではないと、キリストのことを言つたので迫害を受けているが、これは私は仕方がない」

とパウロは言っている。

もし然せば十字架の顛蹟も止みしならん。

十字架にみんな躓いているけれども、もし私がユダヤ教にもつと熱心でやつていれば、あなたの方の味方で、「ああ、サウロさん、サウロさん」と祀りあげられたろうが、とんでもない話だと、パウロは言っているわけです。

12 願くは汝らを乱す者どもの自己を不具にせんことを。

これはずいぶん強いことを言っているね。割礼を少しひどくやると不具になるから。

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。

さつきの1節と同じです。

ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互いに事えよ。

もう申し上げているとおりです。もし、肉に仕えたら、自由は自由でないですよ、それは不自由なんです。囚われているんだから。相対的な自己本位を「肉」という。その自己本位の在り方になつてしまつたらば、それは自我が囚われて、罪に囚われて、同じことだと。さつきルターも言つたでしょ。

「私の旧き我を殺して、新しく生まれさせてくれる」という。

「われキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生くるなり」(ガラテヤ2・20)

というのと同じことを、あそこでルターが言つてくれているわけです。



「愛をもて互いに相仕えよ」

なんて言わなくて、

「愛をもて互いに相担えよ」

と言ったらいくらなものだ。

「お互いに担って行くのではないか」

と。「よーし」というわけで、^{たわらかつ}俵担ぎというのが運動会であるね、ああいうのを大いにやつ

た方がいい。担いの精神だ(笑)。

●第二の自然性

¹⁴それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言に
^{まっつと}て全うせらるるなり。

人間は、自分を愛することは、自愛は本能だが、その本能をパウロは肯定して言っているのではない。キリストも肯定して仰ったのではない。あの本能が逆に、相手を愛することが本能となる、第二の自然性となる。上からの生命はそういうようにならなければ、生命が窒息してしまう。

¹⁵心せよ、若し互いに^か咬み食^{くら}わば相共に亡^なされん。

プロテスタントとカトリックは咬み食らっていた。相共にダメになつてしまふ。主義主張を言っているうちは、いつまでたつても、これが相咬み食らう世界です。主義はよしでしょう、主義は、無教会主義、というのは。あなた方は無教会に育つてないから、私がこんなことを言つたつて、あまり分からないかもしれないけれども。まあ、無教会主義のパリサイ性は、ここにいらしつやるSさんもつらつら経験されて、よく分かつていらつしやる。

¹⁶我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。

「聖霊に在つて、これもそうです、

「聖霊に在つて歩みなさい。そうしたらば、自己中心の生き方がなくなるぞ」

と。「肉」というのはただ肉欲という意味ではないですよ、この「肉」というのは。

¹⁷肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相^も戻^もればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。

「神中心か、自己中心か」ははつきり違う。キリスト中心か、我中心かは違う。人本主義ではダメだということです。エラスムスは人本主義的な自由を言ったのに対して、ルターは「ナイン、然らず」と言つて、「奴隸意志論」というのを書いた。即ち、キリストの奴隸となつたときに本当に自由であるということと言つた。このことはこの本(『無者キリスト』)の中にも出ています。「姦淫の女」というところの序文のところに出ている。

¹⁸汝等もし御霊に導かれなば、律法の下にあらじ。

律法を乗り越えてしまつてゐる。「すべし、すべからず」の世界を乗り越えてしまつてゐる。



超律法の世界です。しかしながら、超律法ということは非律法ということではない。律法を本当の意味において満たしていく。

19 それ肉の行為はあらわなり。

と言つて、たくさんそこに挙げてあるね。感覚的な罪からだんだん意志的な罪に重くなっている。ダンテが『神曲』の地獄を書くときがそうなんです。感覚的なものからだんだん意志的な罪の方が重いんです、悪だくみだとか、叛逆だとか。性的なものや、食欲的、肉欲的なものは一番上の軽い方になっている。けれども、性的なものが人倫を乱すようなことであつたら、もちろんこれは別な角度の重さを持てきますけれども。

即ち淫行・汚穢・好色・20偶像崇拜・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・

この「怨恨・紛争・嫉妬・憤恚」が、感情から意志の方へ向かつていく。一般的に、妬み争いというのは――女性はやつと嫉妬心が強い。男はすぐ争う、喧嘩する――この妬み争いというのはそういうわけで困つたものだ。しかし、そういう世界をいつまでも判断していたら、本当の生命の自由の世界ではないですから。

さつき言つた、いわゆる限界内における相対的な世界から突き抜ける。バルトもブルナーも非常にその異質、ということを持つてきたのはいいけれども、それではこつちの方の相対界をどうしてくれるんだという。絶対界と相対界の橋を渡すものが御霊なんです。御霊の生命です。その御霊のことなしでいくら論じても、やつぱり観念論になる。このことは第三卷(『無の神学』)で私はどうしても書かなければならない。そのことに、ブルナーもバルトも、特にブルナーさんは、終りの方ではだいたい気がついていて、けれども、本当に体験していない。『キリスト道』の中にバルトの言葉をちよつと引用したところがあつたでしよ。

「自分たちはまだ使徒行伝のペンテコステの入口にいる。まだ入っていない」

というようにことが書いてある。それは、一遍本当にキリストの前にぶつ倒れなければダメですよ、それまでは、「信仰、信仰」なんて言つたつてね。

徒党・分離・異端。21猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警めたるごとく、

今また警む。斯ることを行ふ者は神の国を嗣ぐことなし。

パウロはいつも、本質的なことを言つては、あとは今度は、戒めをこつこまかに語っているわけだ。それはまた新しく律法を言っているわけではない。

22然れど御霊の果は愛・

一番先に「愛」ときた。「聖霊の果は愛である」と。聖霊は愛の霊だからね。

喜悅・平和、

あるいは、「平安」ときてもいいよ、それから「平和」です。

寛容・仁慈・善良、忠信・23柔和・節制なり。

まあ、いろいろあるだろう。なにも徳目をあげて、どうしろこうしろというわけではない。



「そういうものが自然にこぼれて、自然に満たしていくわけではなからうか、そうだろう」

ということですよ。

斯るものを禁ずる律法はあらず。

こういうものを禁ずる律法はないじゃないかと。本当にこういった事態が自由になってきた。律法を乗り越えてしまう。

●禁自己

²⁴キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけた

簡単に言うと、

「自己というものを十字架に付けてしまった」

ということ。そうすると、これは禁欲なんて思ったらいかんですよ。

自己中心の欲はいかん。けれども、人間はいろんな欲を――欲というか、求めるものを持っているわけだ――それがキリスト中心、神中心に動いていればいいわけです。「よし、勉強したい」というのでも、

「私の名声をあげるために勉強したい」

というのは欲だよ。同じ勉強してても、それは自我中心の勉強だ。

「就職でもつていいところに行きたいから勉強しよう」

なんて、みんなこれは自我中心だ。そうでなくて、

「本当に学ばざるを得ない。神の栄光をどうぞ私のこの勉強を通して、そのうちに

現してください」

と言ってやっているところの勉強という事態は同じ欲でも神に即した欲です、「欲」という言葉はおかしいけれども。パウロさんはいろんなものを持っていたのが、全部キリスト中心に回転を始めた。だから、凄いことになってるんです。禁欲したわけではない。

禁欲ではなくて、禁自己なんだ。自己を禁じた。自我を禁じた。我執を禁じた。禁我なんだ。我執を禁じた。「禁ずる」と言ったって、なにも律法ではない。我執は、禁ずるなんて言わなくたって、もう十字架されてしまっているから。

結局、すべてそうです。十字架が全部、回転の要かなめですから。十字架で完全に何ものも無き、無者とされてしまう。無者即無限無量者となる。無限無量者は、無限無量なる神の栄光がこの無限無量を通して現れていく。こういうはつきりした自覚を、我々はいよいよ毎日の生活で、これを身につけていかないことにはしょうがないものな。

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。²⁶互いに挑み、互いに妬ねたみて、虚むなしき誉ほまれを求むることを為すな。



「もし」じゃないよ。

「もう、御霊において生きれば、御霊によって歩まないではいられませんねえ」

というわけです。それで行こうではないかと。相手が随分しようがないから、パウロは一生懸命でこれを言っている。まあ、ガラテヤ書におけるパウロの呻きはそういうわけです。

●弥陀の本願他力の名号

一遍上人の言葉の中に、

「他力不思議の名号は、自受用の智也。」

なんて書いてある。「不思議」というのは、思ひ議ることができないこと。「名号」というのは「南無阿弥陀仏」。南無阿弥陀仏というのは他力の不思議の名号だから。他力の不思議によつて南無阿弥陀仏と称われるのだから。「自受用」とは、自ら受けとつて用いること。即ち、自らというのは、阿弥陀さんがやつてきて、そしてそれを受けとつて、それを活用するというのが、「自受用」という妙な字だ。

「自受用と云うは、水の水をのみ、火が火をやき、松はまつ、竹はたけ、其体おのれなりにして生死なし。」

と。「水が水を飲み、火が火を焼く」だつてさ。「生死なき」というのは、もう相対的な生死を超越した世界。「水が水を飲み、火が火を焼く」なんてのは、私がよく時々言っている、

「花を見れば花となり、雲を見れば雲となる」

という、主体・客体の主客の相対的な――「汝と我」なんてマルチン・ブーバーが言っているけれども――そんなところはもうひとつ乗り越えてしまう。主体と客体が溶け合ってしまう。「水が水を飲む、火が火を焼く」という、本当に一つになつてしまっている世界です。そういうやつぱり一如の事態を言っている。本願の一如の事態を言っているわけです。

「然るに、衆生、我執の一念にまよひいしより以来、常没の凡夫たり。ここに、

弥陀の本願他力の名号に帰しぬれば、生死なき本分に帰るなり。」

「弥陀の本願他力の名号」、本願他力が働いている南無阿弥陀仏という事態に入れば、もはや生死なき本分に還ると。それが我執の一念に迷うからダメだと。はつきり言っているね、やつぱり。そういう意味で、本当にこの一流の坊さんの事態を生きているような仏教徒と云うのはどれくらいいるのかね。

「安心といふは南無なり。」

なんていう面白い言葉がある。

「本当の平安というのは南無、弥陀に帰入することである」

と。まあ、言いだしたきりがいいから、よしておきましょう。

